

令和4年度 上里町立郷土資料館企画展

おひな様とおかいこ様

雛人形から見る上里町の養蚕文化



場所：上里町立図書館・郷土資料館 企画展示室

展示期間：令和5年2月4日（土）～3月26日（日）まで

時間：午前9：00～午後7：00

図書館施設工事及び蔵書点検のため、2月13日～24日は休館

ごあいさつ

この度は、令和4年度企画展へお越しいただき、誠にありがとうございます。

今回、ご紹介する資料は大字忍保（おしぼ）の敷地家と福田家から寄贈を受けた雛人形（ひなにんぎょう）です。小物類を含め、あわせて200点以上が寄贈されました。郷土資料館では、令和3年から4年度にかけてこれら雛人形類を保存、活用するため、整理作業と詳しい調査を行いました。その結果、作られた年代がおよそ明らかとなり、古いもので100年以上、大切に伝えられてきたものであることが判明しました。

いずれの人形も煌びやかで可愛らしく、その当時のひな祭りの華やかさを今に伝える貴重な資料になっています。

また敷地家、福田家は、かつて養蚕（ようさん）を行っており、関連する古文書等も多数、寄贈されました。養蚕とは、カイコガの幼虫（以下、蚕といいます）を育て、絹の原料となる繭（まゆ）を収穫することです。繭から作られた生糸は海外に輸出され、その利益は戦前のわが国の近代化や戦後の復興をうながしました。上里町でも「おかいこ」・「おこさま」・「おかいこさま」等とよばれ、昭和の末ごろまで養蚕が盛んに行われてきました。今回の展示では、養蚕と雛人形の知られざる関係をひも解きます。

最後になりますが、今回展示した雛人形の多くは手作りで、ひとつひとつの表情にも違いが見られます。その中には身近な人によく似た顔の人形もいるかもしれません。大切な人を思い浮かべながら雛人形を鑑賞してみてもいいかもしれません。

郷土資料館 一同



第1章 おひなさま、大集合！！

雛祭りは、女の子の健やかな成長を祈って3月3日行われる行事のことです。「雛人形」は、この時に飾られる人形のことを指します。一般に「おひな様」よばれ、今から1,000年ほど前から人々の間で親しまれてきました。雛人形の原型は紙で作った人形（ひとがた）を使い、災いや病気等を取り除く儀式であり、現在のように男女の人形（女雛（めびな）・男雛（おびな）といいます）を飾るようになるのは、その後600年ほど経った江戸時代からです。これらの人形は宮中をイメージして作られているため、一般的に「内裏雛（だいらびな）」と呼ばれ現在も親しまれています。

福田家と敷地家の雛人形は、この「内裏雛」をはじめ、「衾雛（かみしもびな）」、「浮世人形」と呼ばれる3種類で構成されています。ここでは種類ごとに両家の人形を紹介します。

敷地家・福田家の内裏雛

現在、私たちの想像するような雛人形が誕生したのは、今から400年ほど前の江戸時代からです。これらは、天皇や皇后をはじめとする宮中の人々の姿を模して作られており、「内裏雛」と呼ばれます。内裏雛は、大名や有力商人をはじめとする都市部の裕福な人々の間で流行し、様々な種類の雛人形が作られていきました。

さらに現在から120年ほど前にあたる明治時代後半になると、地方の一般家庭でも広く雛人形が飾られるようになります。敷地家・福田家から寄贈された内裏雛は「古今雛」と呼ばれる種類で、地方で雛人形が普及したこの時期に作られたものです。

古今雛（こきんびな）



古今雛（忍保 敷地家 明治時代）

古今雛は、人形師の原舟月（はらしゅうげつ）によって江戸時代後期に考案されたと伝えられています。衣装が豪華であり、顔の表情などが写實的に表現されているのが特徴です。その美しさから人気を博し、現在、流通している雛人形の直接のルーツになりました。

敷地家と福田家からは、合せて4対の古今雛が確認されています。華やかで美しい作りになっており、袖に縫われた刺繍が特に艶（あで）やかです。衣装の染色には、ヨーロッパ等から輸入された化学染料が使われており、近代に作られたものであることが分かります。いずれも雛人形が地方で普及した明治時代に作られたものと考えられます。また、女雛のつけている冠はいずれもガラス製のビーズでできており、見ていて華やかで幸せな気分になります。

古今雛



▲ 古今雛（福田家 明治時代）



▲ 古今雛（福田家 明治時代）



▲ 古今雛（福田家 明治時代）

古今雛

隨身（ずいじん）

隨身は、左大臣、右大臣と呼ばれることもありますが、本来は女雛と男雛を守る近衛府の武官（ボディガード）を模しています。また、実際の宮中には2つの近衛府があり、それぞれ橘と桜の木が植えられていました。そのため雛人形でも向かって左側に橘、右側に桜の木を配置します。



▲ 隨身（福田家 明治時代）

五人囃子（ごにんばやし）



五人囃子（忍保 福田家 明治時代）

五人囃子（ごにんばやし）は、音楽を演奏する5人の楽団を模した人形です。それぞれ、歌、笛、小鼓（こつづみ）、大鼓（おおかわ）、太鼓（たいこ）の5パートを担当しています。福田家の五人囃子は、おかっぱ頭の男の子の姿をしており、一緒に飾られた古今雛より小さくて可愛らしい印象を受けます。今にも子供達の歌声が聞こえてきそうです。

また、これら人形の底部と台座にはそれぞれ、「イチ」、「福田イチ」と持ち主の名前が墨書きされていました。後述する福田家の祢雛（かみしもびな）には、「明治三十五年福田イチ」と墨書きされたものがあり、この五人囃子も同時期に作られたものと考えられます。

御殿雛（ごてんびな）

貴族が生活した「御殿」を模して作られた雛人形です。現代のドールハウスのように女雛と男雛は御殿の中に飾られます。福田家の御殿雛には、女雛、男雛のほか、三人官女や隨身、仕丁（しちょう：貴族などに仕えた労働者）が、敷地家のものには、女雛、男雛、三人官女、隨身が付属します。女雛と男雛を納めた御殿を雛段の最上部に飾り、その下に三人官女、隨身等を飾りました。どちらの人形もよく似た作りをしており、同時代に作られたものと考えられます。

また、福田家には寄贈された雛人形を写した白黒写真が残されています（写真左）。裏面には、「昭和33年3月」と書き込みがあることから、その年の雛祭りの様子を撮影したものであることが分かります。そのため、福田家及び敷地家の御殿雛もそれ以前の昭和前半頃に作られたものであることが分かります。



▲昭和33年3月付の福田家の写真。後ろに今回展示した雛人形が見える

福田家の御殿雛▶



御殿雛 (ごてんびな)



御殿雛（敷地家 昭和前半頃）

コラム 敷地家・福田家ひな人形のちがい

敷地家と福田家の御殿雛は作りが非常によく似ていますが、異なっているところも多く見られます。例えば人形の衣装は、敷地家のものは衣装に染料で模様を描いているのに対し、福田家の人形の衣装は、あらかじめ染めた糸をしっかりと織り込んで模様を付けています（先染後織）。また、構造も異なっており、福田家の人形の顔は石膏製であるのに対し、敷地家は桐のおが屑を糊で固め、その上から胡粉で塗り固めた作りになっています。前者は、昭和の中頃に普及した作り方であり、現在の雛人形の作り方の主流となっています。後者は江戸時代から行われている伝統的な作り方です。つまり、制作手法から福田家より敷地家の方が古い可能性が考えられるのです。

また、福田家の雛人形と比べ、敷地家の御殿雛は全体的に質素な印象を受けます。憶測になりますが福田家の雛人形の年代を昭和30年頃とし、敷地家の御殿雛がやや古いものと考えれば、敷地家の雛人形はちょうど戦中から戦後の混乱期に当たると考えられます。

袴雛（かみしもびな）

袴雛は、袴（かみしも：武士が儀礼等で着る正装のこと）を着け、座った姿をした人形のことを指します。明治から昭和にかけて、現在の埼玉県鴻巣市周辺で盛んに作られました。袴雛について、研究が進んでいないため、用途等詳しい情報は不明ですが、女の子の「初節句（誕生後、初めて迎える桃の節句）」のお祝いとして贈答用に利用されたと伝えられています。『上里町史』別巻には、御殿雛と袴雛と一緒に飾った写真が掲載されており、町内でも雛人形の一種として親しまれてました。また、人形を販売した店舗のラベルが貼られたものもあり、雛人形の流通過程を考えるうえで重要な資料になります。

福田家からは21点、敷地家からは1点の袴雛が見つかっており、いずれも可愛らしい表情をしています。

このうち福田家からは、持ち主と送り主の名前、さらに日付が書き込まれた袴雛が5点見つかりました。後者は、その人形が送られた日付を表していると考えられます。このことから見つかった袴雛が贈答用の人形であったことが分かります。書き込まれた日付で最も古いものは、明治35年（1902年）となっており、その頃には町内でもすでにひな祭りが行なわれていたことが分かります。



▲ 袴雛（福田家 明治～昭和頃）



▲ 袴雛（福田家 明治）



▲ 袴雛（福田家 明治）

祢雛



▲ 明治35年銘入り祢雛
(福田家 明治35年)
福田家の雛人形のうち、はっきりとした年代の分かる最古の事例です。



▲ 祢雛裏面
左の人形の裏面です。「明治三十五年 福田イチ」と聞きこまれており、明治35年に福田イチさんに贈られた人形であることが分かります。



▲ 祢雛 (福田家 大正3年)
高さ39cmの大型の祢雛です。裏面に「大正三年三月 福田イチ」と記入されています。大正3年の雛祭りに贈られたものであることが分かります。

▲ 祢雛 (福田家 明治時代)
高さ31cmの大型の祢雛です。裏面に「仁手村 福田イチ」と記入されています。仁手村とは現在の本庄市の仁手に明治22年まで存在した村です。イチさんに宛てて仁手村の親戚が贈ったものと考えられます。

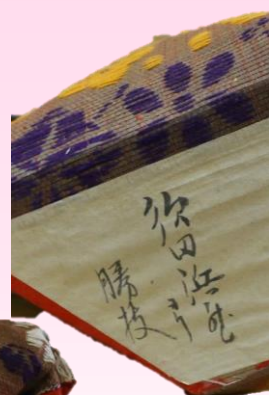
衾雛2



▲ 衾雛（忍保 福田家）
底部に「利一 延子」とあります。



▲ 衾雛（忍保 福田家）
底部に「武州本庄町 大黒屋赤作商店」とあり、この人形が現在の本庄市で購入されたものであることが分かります。



▲ 衾雛（忍保 福田家）
底部に「須田浜蔵ヨリ勝枝」の印が描かれています。勝枝さんに対し、贈答されたものであることが分かります。

浮世人形（うきよにんぎょう）

「浮世人形」とは、歴史的な出来事や神話、物語等を題材にして作られた人形のことを指します。敷地家からは35点、福田家からは38点の浮世人形が見つかっています。これらの人形は明治から昭和にかけて作られたもので、中には贈り主と持ち主の名前が書きこまれているものがあります。裱雛とあわせ浮世人形も初節句の贈答品であったことが分かります。また、人形のモチーフは、長寿や健康、豊かさ、聡明さ等の意味を持っており、子供達の健やかな成長や幸せを祈って送られていることが分かります。

聡明ーかしこい子に育ってほしいー



◀二宮金次郎（敷地家 昭和）

二宮金次郎は、江戸時代に実在した人物です。金次郎は幼名（子供のころの名前）で、幼少期は貧しい中で勉学に励み、成人後は尊徳と名のり、農政家（のうせいか：農業経済学者）として活躍しました。かつて日本中の小学校には、二宮金次郎像が作られており、長く子供達のお手本とされていました。

天神（福田家 昭和）▶

満開の梅の下、お使いとされる牛に乗った姿をしています。天神とは、菅原道真（すがわらのみちざね）公のことをいいます。平安時代に学者、政治家として活躍した人物で、不幸にも政争に巻き込まれ、失意の中で亡くなります。死後、雨や雷をもたらす天神様として信仰されました。また学者として活躍したことから、学問の神様として信仰されるようになります。天神様のようにかしこい子に育ってほしいと思う親の気持ちが伝わってきます。



浮世人形（うきよにんぎょう）

健康－健康で長生き－

高砂（敷地家）▶

高砂（たかさご）とは、能の演目の一つで、松の精霊である老夫婦を描いた物語です。長寿や夫婦円満を象徴するストーリーで、松の木と仲むつまじい夫婦の様子が表現されています。子ども達が末永く幸せに暮らせることを祈り、飾られたものと考えられます。高砂の人形は敷地家、福田家とも多く確認でき、人気のあるテーマだったようです。



◀ 鍾馗様（福田家）

鍾馗様（しょうきさま）は中国にルーツをもつ神様です。外見は、髭面で頭巾をかぶった男性の姿をしています。また顔つきも厳しく、大きな目でこちらを睨みつけるような姿をしています。これには魔除けの意味があるとされており、疱瘡（ほうそう：天然痘等の伝染病のこと）除け、学業成就といったご利益があるとされます。そのため、端午の節句（こどもの日）でも鍾馗様の人形や絵が飾られます。雛人形と一緒に収められていたことから、子供達の安全を祈り雛人形と一緒に飾られていたと考えられます。

幸福－七福神 豊かで幸せに－

七福神とは、インドや中国、そして日本の神様がミックスし生まれた7人の福の神の総称です。一般的に、寿老人（じゅうろうじん）、福祿寿（ふくろくじゅ）、恵比寿（えびす）、毘沙門天（びしゃもんてん）、大黒天（だいこくてん）、布袋（ぼてい）、弁財天（べんざいてん）のことをいいます。敷地家と福田家からは福祿寿、恵比寿、布袋、大黒天、弁財天が見つかっています。

◀ 寿老人（福田家）

寿老人も中国にルーツを持つ神様です。長い頭と白いひげを持つ老人の恰好で描かれ、長寿にご利益があると考えられています。敷地家、福田家ともに複数点見つかっています。子供たちの長寿を祈り飾られたものであることが分かります。



浮世人形



▲ 恵比須様（福田家）

日本神話にルーツを持つ神様です。釣竿と鯛を持った姿をしています。商売繁盛や五穀豊穡をつかさどるとされます。



▲ 布袋様（敷地家）

布袋様は中国に実在した徳の高いお坊さんがモデルになっています。大きなお腹をしており、朗らかな笑顔をしているのが特徴です。



▲ 弁天様（福田家）

インドにルーツを持つ神様です。七福神では唯一女性として描かれます。正式には弁財天といい、音楽をはじめ芸術や知性、財力等をつかさどるとされます。また、地域によっては水運や農業の神様でもありました。

敷地家、福田家とも弁財天と思われる人形がみつかっています。女神であることから、女の子のお祝いの品や雛祭りの飾りとして特に人気があったと考えられます。



▲ 大黒様（福田家）

インドにルーツを持つ神様ですが、日本神話に登場する大国主命（オオクニヌシノミコト）という神様と合わさり、同じ神様として信仰されるようになりました。外見は、打ち出の小槌と福袋を持った姿をしています。食べ物や金銭の豊かさをつかさどる神様です。

浮世人形

物語と伝説 みんなのヒーロー

浮世人形の中には、物語や昔話の有名なシーンを描いたものも多く見られます。敷地家・福田家の人形からは、おとぎ話や伝説をモチーフにしたものが多く見つかっています。ここからも当時もひな祭りが子供たちのために行われていたことがわかります。また、物語の主人公のように立派に育ててほしいという大人たちの願いが込められていたのかもしれません。

金太郎（敷地家）▶

「金太郎」は、平安時代の武士である坂田金時（さかたきんとし）の子供時代をモチーフにした物語です。山奥で生まれた金太郎は、森の動物たちと遊んだり、ときに強くて悪い動物や化け物などと戦い、たくましく成長していきます。敷地家の浮世人形からは、金太郎と鯉が一緒に見つかり、物語のワンシーンである鯉との決闘をモチーフにしていると考えられます。



◀ 浦島太郎（福田家）

「浦島太郎」は、竜宮城へ行った若者について語ったおとぎ話です。人形は箱を持った若者の姿をしています。背景には松が描かれており、この場所が海辺であることを表しています。浦島太郎が竜宮城から戻り、玉手箱を開ける直前の様子を描いたのでしょうか。この直後、浦島はおじいさんの姿になってしまいます。

浮世人形



◀ 花咲かじいさん

「花咲かじいさん」は、正直じいさんと犬が登場するお話です。正直じいさんは犬の導きで宝物を掘り当てますが、隣に住む欲張り爺さんに犬を殺されてしまいます。殺された犬の死骸からは木が生え、正直爺さんはその木で臼を作ります。しかし、これも欲張り爺さんに燃やされています。燃え残った灰を枯れ木にかけると、枯れ木は満開の桜に変身し、それを見た殿様が正直爺さんに財宝を与えます。

敷地家の人形は、老人ではなく可愛らしい男の子の姿にアレンジされています。

小野道風（福田家）▶

小野道風（おののとうふう）は、平安時代に活躍した芸術家です。日本特有の書道のスタイルを作りました。

人形はヤナギの木の下で道風がたたずむ姿をしています。箱には、字が異なりますが「東風（とうふう）」と書かれており、この人形が小野道風をモチーフにしていることが分かります。道風には書道を諦めかけた時、ヤナギの葉に飛び乗ろうとして何度も飛び跳ねるカエルを見かけたことで、一念発起し書を完成させたという伝説があります。現在はなくなってしまっていますが、人形のヤナギの木にもカエルが付いていたと考えられます。



◀ 桃太郎（敷地家）

桃から生まれた桃太郎が鬼退治に行くおとぎ話です。作られてから時間がたっているため、のぼり旗等、付属する道具は失われていますが、髪形や衣装からこの人形が桃太郎であることが分かります。

浮世人形

きらびやかな人形たち！

敷地家、福田家の浮世人形には、これまで確認した人形のように信仰や物語等と関係が見られないものも多くあります。これらはひたすら可憐で美しく、見た者を魅了する作りになっています。これら人形が贈答用であることを考えると、贈る側と受け取る側、双方の喜ぶ姿が想像されます。



▲羽衣（はごろも 敷地家）



▲梅小町（うめこまち 福田家）



▲天女（てんにょ 福田家）



▲天女（てんにょ 敷地家）

浮世人形 きらびやかな人形たち2



▲ 天女（てんにょ 敷地家）



▲ 藤娘（ふじむすめ 敷地家）

おもちゃ類 いっしょに飾られた郷土玩具・ぬいぐるみ

敷地家、福田家の雛人形を納めた箱からは、雛人形と一緒に飾られたと考えられるおもちゃ類も多く発見されました。

これらは、貝細工やこけし人形のような郷土玩具のほか、ぬいぐるみや児童向けの雑誌の付録なども含まれており、いずれも昭和期のものと考えられます。子供たちは、雛祭りが来るとこれもこれもと自分の宝物と一緒に並べていたのかもしれない。



ぬいぐるみ類（敷地家）

おもちゃ類
いっしょに飾られた郷土玩具・ぬいぐるみ 2



▲ こけし人形（敷地家）



▲ こけし人形（敷地家）



▲ 貝細工（福田家）



▲ ぬいぐるみ（敷地家）



▲ 小学館『小学三年生』3月号付録（敷地家）

第2章 敷地家・福田家と養蚕業

－おかいこさまを飼う－

ここまで、敷地家と福田家から寄贈された雛人形を紹介してきました。どれも古くて立派で豪華な印象を受けたのではないのでしょうか。この2つのお宅は豪華な雛人形を持っていること以外で共通点があります。その共通点は明治から昭和にかけて養蚕業を行っていたということです。そしてこの時期は雛人形が作られ、飾られていた時期と合致します。ここでは、敷地家・福田家の養蚕業に焦点を当てながら、雛人形と養蚕業の関係性を探ってみたいと思います。

養蚕とは？－上里町と養蚕－

養蚕（ようさん）とは、蚕（かいこ：写真）を育て、繭（まゆ）を収穫することをいいます。蚕が作る繭からは、美しい糸（生糸：きいと＝絹）が取れ、明治から昭和にかけてヨーロッパやアメリカへの輸出品として高値で取引されました。

そのため、上里町でもその時期に町中で養蚕が行われるようになります。養蚕がもたらした利益は大きく、その収益から神保原駅や神保原郵便局が作られるなど、地域発展をもたらしました。さらに明治40年（1907年）に大和組神保原製糸場が神保原駅前に誘致されました。これにより、生糸の原料となる繭の需要はますます高くなり、さらに盛んに町内で養蚕が行われるようになります。このころの上里町での養蚕はどのようなものだったのか、見ていきます。



上里町の養蚕風景

蚕（埼玉県北部地域振興センター本庄事務所提供）▶

わが国で蚕の飼育が行われるようになるのは、今から2,500年ほど前の弥生時代からです。稲作と一緒に大陸より持ち込まれたと考えられており、以来、人の手によって大切に育てられてきました。養蚕の作業は女性たちを中心に営まれており、技術が進歩した現在でも、人の手による餌やりや食べ残しの掃除など、手が離せません。しかし、養蚕で生産される繭はそれ以上の収益ももたらしました。一般に蚕のことを「おかいこさま」と尊敬語で呼んでいるのはそのためです。現在、町内で養蚕を行っている農家は一軒もいませんが、現在も飼育に使われた道具が多く残されています。

ここでは昭和頃に使われていた養蚕道具を紹介しながら上里町の養蚕風景を紹介します。



▲ 二階の蚕室で上族（大字神保原町 昭和初頭）

養蚕の方法

管理された環境での蚕の一生は約50日と言われています。そのうち繭を作るまでにかかる期間は、30日ほどといわれています。その間に蚕は桑だけを大量に食べて大きくなり、脱皮を4回繰り返して繭になります。彼らを世話をする養蚕農家の女性たちも大忙しになります。蚕室の温度を維持したり、餌となる桑の葉をとったり、フンの掃除をしたりしながら、不眠不休で蚕の飼育を行いました。昭和期の上里町では4から9月にかけて年間で最大5回もの飼育を繰り返し行い、繭を生産していました。

養蚕道具

桑摘み籠（くわつみかご）▶

餌となる桑を収穫する際、収穫した桑の葉を入れるのに使用しました。町内の養蚕農家では通常、各個人で餌の供給源である桑園（そうえん）を所有しており、大量の桑の葉を収穫しました。蚕の成長のピークには、朝昼晩計6回の給桑を行い、飼育を担った女性たちは寝ずに作業を行いました。また、それでも桑が足りない場合はよその桑園からクワを買い入れ、飼育しました。



蚕箔



給桑台

▲ 蚕箔（さんぱく）と給桑台（きゅうそうだい）

蚕を飼育するための浅いカゴのことをいいます。通常は長方形をしており、この中に紙をしき、その上で蚕の飼育を行いました。通常、蚕箔は蚕棚の上に載せ、給桑（餌やり）等を行う際は、蚕棚から作業台の上に移し作業を行いました。

養蚕道具2

藁族（わらまぶし）▶

蚕が繭になる際に利用します。通常、蚕は4回の脱皮を繰り返してから糸を吐き繭になります。4回目の脱皮後に蚕箔から藁族に移動させます。この作業は、上族（じょうぞく・おこあげ）と呼ばれ、蚕は藁に糸を巻き付けながら繭を作ります。上族が終わると一連の蚕の飼育も終わりとなり、あとは出荷を待ちます。



◀木鉢（きばち）

上族の際など、蚕を移動させるときに利用しました。正式にはカルトンといいます。上族で成熟した蚕（ジユクサン・ズウとも）を拾うのに利用されることから「拾い鉢」とも呼ばれました。

火鉢（ひばち）▶

蚕室の温度管理に使った道具です。特に蚕の成長に最も適した温湿度を維持しながら飼育する「折衷育（せっちゅういく）」で利用されました。折衷育は、その普及により安全かつ短い期間で繭を飼育することにつながりました。さらにこの方法と秋蚕種が組み合わせることにより、年間で飼育を複数回行うことができるようになり、繭の生産量の拡大につながりました。



蚕室

蚕室（さんしつ）とは、蚕を飼育するための施設のことです。

昭和期の町内では、家族が住む母屋（おもや）のほか、養蚕専用の小屋を建て、その両方を蚕室として利用していました。

町内では母屋に切妻屋根（三角形をした屋根）を持つものが盛んに作られており、室内を蚕室として利用するため、広く設計されています。最近まで福田家では、昭和3年に建築された母屋と明治期のものと考えられる蚕室が残されていました。また最盛期には、母屋全体を使って養蚕をするため、人間の生活空間が狭くなり、縮こまって過ごしたという話もあります。

敷地家は、当時を知る資料が残されていませんが、江戸時代に建てられた母屋の二階で養蚕を行っていたといいます。町内では江戸時代までさかのぼる農家建築の事例は少ないため、今後は当時の写真等、関連する資料の発見が望まれます。



▲ 福田家の母屋



▲ 福田家母屋2階の蚕室



◀ 福田家納屋

屋根中央部の突起を「高窓」といいます。明治中頃に流行し、火鉢等で加温する際に煙出しとして利用しました。

収穫した繭の出荷

敷地家には、かつて神保原停車場前（現JR高崎線神保原駅前、旧トライアル付近）にあった大和組神保原製糸場に繭を納入した際の文書が残されていました。

「大和組」は、現在の長野県岡谷市を本拠地とした器械製糸業者です。繰糸機（そうしき）という大型の機械を用いて工業的に生糸の生産を行っていました。神保原周辺では、原料となる上質な繭が手に入り、さらに鉄道で燃料の搬入や製品の出荷ができるという利点があり、明治36年に地元の有志によって工場の誘致が行われました。これより、町内では、女工さんをはじめとする従業員の居住が増え、それにあわせ郵便局が開設される等、神保原停車場周辺は次第に発展していきました。

大和組 神保原製糸場とは



▲ 昭和前半の大和組神保原工場周辺（神保原町 高野実氏 提供）

明治36年に誘致された大和組神保原製糸場は当初、「神保館（じんばかん）」と呼ばれていました。その後、事業の拡大を行い、大和組神保原製糸場と名称を変え、昭和初頭には、※従業員数578名（うち女工さんは518名）になる大規模製糸工場に成長しました。場内には、工場を稼働させるためのボイラーの煙突があり、時代の変化によって工場が閉鎖される昭和57年まで、町のシンボルとなっていました。

※昭和8年『製糸工場概況：女工紹介資料 昭和8年11月調査』より



▲ 昭和前半頃の大和組神保原製糸場

神保原製糸場の内部

工場の内部では、繭から糸を引き出す作業（繰糸：そうし）や出来立ての糸を巻き直す再繰（さいそう：揚げ返しともいいます）を経て、生糸の出荷を行っていました。

神保原製糸場は現在は失われていますが、かつて神保原駅前にあった小林写真館が作成した絵葉書（右写真3枚、昭和初期のころ印刷か）から当時の様子を知ることができます。



繰糸（写真上）
左右の機械が糸を作る繰糸機です。女工さんはこの反対側で糸を取る作業をします。



再繰（写真中央）
繰糸で作成した糸を巻き直し完成品にします。足元にある大きな糸巻きが作業後、小さな糸巻きが作業前の糸です。



梱包（写真下）
再繰した糸をパック詰めする作業です。枠に巻かれた生糸を外し、ねじった状態にして出荷しました。

繭の搬入書類

生糸の原料となる繭は、大和組の場合、その多くを上里町周辺の養蚕農家から調達していました。敷地家では、生産した繭をリヤカー等で工場に運び搬入したといえます。

今回の調査で敷地家からは、生産した繭を大和組に搬入した際の手続き書類がまともに見つかりました。繭の納入時にどのような手続きがされていたのかよくわかります。

検査調書 黄繭用紙

(昭和6年敷地家) ▶

養蚕農家から搬入された繭は大和組内で検査され、価値づけが行われます。また、生糸の品質を守るためには繭の種類や規格をそろえる必要がありました。そのため養蚕農家は、大和組によって指定された品種の飼育を行っていました。

正量繭検査				検査第 号	
肉眼検査		調製検査			
一審	点	光籠	粒	点	
二審	点	玉繭	粒	点	
三審	点	不整繭汚繭	粒	点	
決審	点	若孫	粒	点	
経緯検査	点	上級	点		
時間	31分	飼育点	点		
経緯	1258分	風量計	点		
若孫	点	得点計	点		
経緯計	102	差引点	点		
決定等級	等乙	價格(円)	円		

受付第 4 號	受付日 昭和6年6月14日
忍保 養蚕組合	
敷地 伊保殿	
品種名 大和組指定	
受付繭	
正味	5 340
決定等級	等乙
甲決定	3.30
乙買代	
總代金	17.62
内渡金	.
差引金	.

大和組神保製絲所原料部

荷受伝票 (敷地家) ▶

検査後、繭は大和組の原料部に納められました。写真は、昭和6年(1931年)6月に繭を納入した際の荷受伝票です。この伝票では、敷地家は、大和組の指定品種の黄繭を5貫340匁(約20kg)納入していることがわかります。

荷受伝票	
大和組神保製絲所原料部	
No. 1	出張所 表裏印
受 付 組 合 名	組 合 員 氏 名
昭和6年6月14日 忍保	敷地伊保殿
記 4 種指定白黄引	取 0 匁
上 目 風 雲 摘 要	
5940	600
合計 5貫940匁	買 600匁
正味 5340匁	代金 圓 錢

白繭(右)と黄繭(左) (参考) ▶

蚕の繭には大きく分けて白繭と黄繭(きまゆ・こうけん)の2種類があります。白繭からできる糸は白色、黄繭から生産される糸は、黄色をしています。大和組では白繭と黄繭両方の繭を使用し、糸を作っていました。

写真の黄繭は、群馬こがねという品種の繭です。



救地喜一郎殿

明細表

昭和七年八月廿五日

初級南代 七月廿五日

十月七日

暖取南代 七月廿五日

計

内渡金

昭和七年八月廿五日

五九〇〇

本府貸付

十月廿五日

一〇九〇〇

十月廿五日

五八〇〇

昭和七年八月廿五日

五八〇〇

十月廿五日

五八〇〇

十月廿五日

五八〇〇

十月廿五日

五八〇〇

埼玉縣児玉郡神保原町

大和組神保原製絲所

電話(本庄)一三〇番
電話(上)一八(一八)

二二六四五

三二四六六

五七六九一

昭和七年七月廿五日

五八〇〇

八月廿五日

六六〇〇

昭和七年三月廿五日

五八〇〇

計

五八〇〇

昭和七年四月八日

一三九〇

右昭和拾參年四月八日

又丹次

埼玉縣児玉郡神保原町

大和組神保原製絲所

(蓋印) 大和組神保原製絲所

写真は昭和13年の3月31日付の代金の支払い明細書です。明細書は、昭和11年の初秋蚕と晩秋蚕の代金を表しており、合計で578円91銭分の繭を敷地家が
大和組に納めたことがわかります。また、敷地家には昭和13年3月まで、そのうちの565円1銭の代金を受け取っていることがわかります。

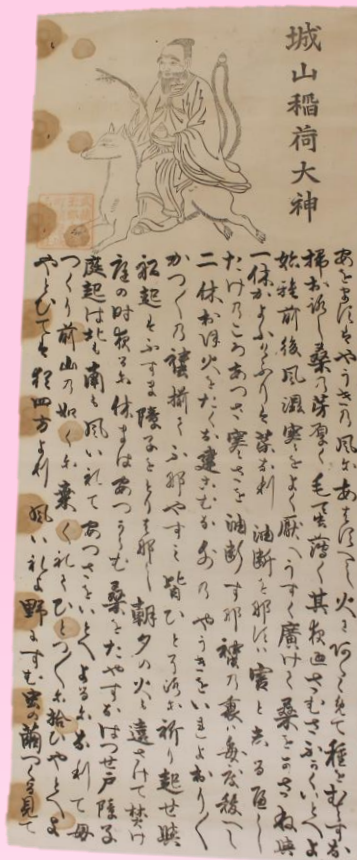


繭の代金の預り証書です。昭和10年10月の時点で、敷地家では合計142円46銭の繭の代金を預けていることがわかります。

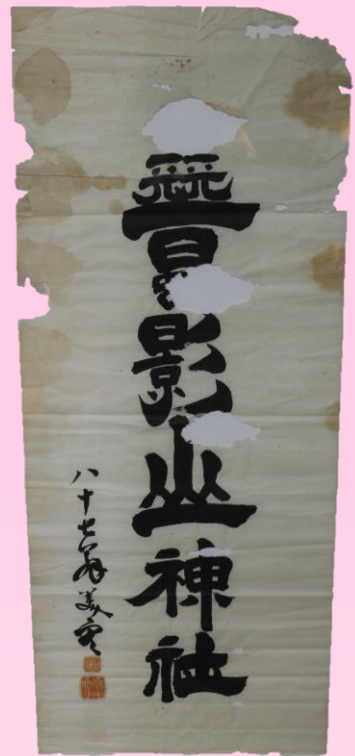
養蚕信仰

—養蚕の成功を祈る—

養蚕に関する信仰は、養蚕が盛んだった当時、各地で行われており、町内でもお稲荷様等、地域の神社や蚕影神社（こかげじんじゃ）等の蚕神（養蚕を守護する神仏）を祀り、養蚕の成功を祈って願掛けをしていました。敷地家では、養蚕にご利益があるとされる本庄市の「城山稲荷」の掛け軸が、福田家では蚕神である「蚕影山（こかげさん：茨城県つくば市にある蚕影神社のこと、埼玉県をはじめ、関東中の養蚕農家から信仰をあつめました）」と書かれた書が残されており、養蚕の成功を祈り掲げられていたと考えられています。



▲ 城山稲荷掛け軸
（敷地家）明治
稲荷明神の図像とその下に養蚕の方法が記されている。



▲ 蚕影山神社書（福田家）

蚕室に貼られた祈り 養蚕守護符

福田家の蚕室からも養蚕の安全と豊作を祈願して貼られたお札が発見されました。

福田家では大字勅使河原の大光寺蚕影山のほか、神川町大字二宮の金鑽神社の境内社である蚕影山神社や秩父市にある三峰神社から御札をもらい受け、養蚕の安全を祈っていたことが判明しました。

特に大光寺の蚕影山の護符には馬鳴菩薩とされる女神像が描かれており、神々しさを感じます。



▲ 蚕室の柱に貼られた養蚕守護符
（福田家）
神川町金鑽神社境内蚕影山神社（左）と秩父市三峰神社（右）



▲ 蚕室の柱に貼られた養蚕守護符
（福田家）
大字勅使河原大光寺境内蚕影山

蚕種屋（たねや）としての福田家

令和3年度に行った調査で福田家からは、雛人形のほかに幕末から明治期にかけて書かれた古文書が多く発見されており、その中からは蚕種（さんしゅ）の製造販売に関する記録が発見されました。「蚕種」とは、養蚕を行う元になる蚕の卵のことで、一般に「たね」、「さんたね」とも呼ばれます。町内では明治から大正時代にかけて、蚕種を生産する「蚕種屋（たねや）」が多く点在しており、彼らが生産した蚕種は各地に出荷されていました。古文書の発見により福田家も蚕種屋の一つであったことが確認されました。

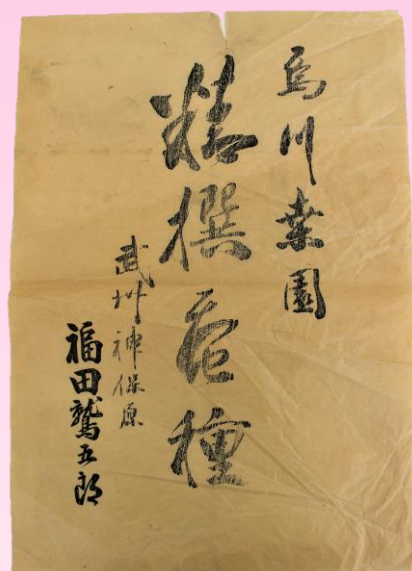


▲ 古文書類書（明治21年・31年 福田家）



▲ 蚕種製造鑑札と蚕系組合証（福田家）

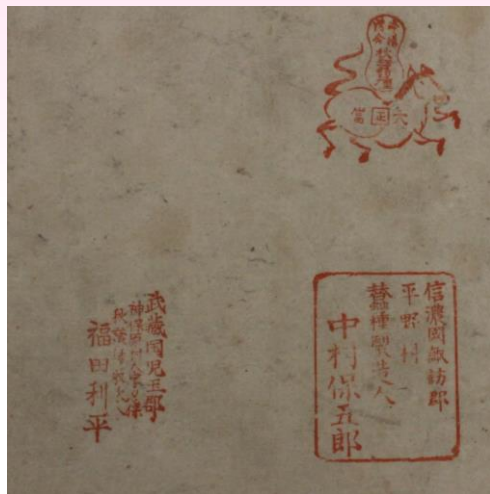
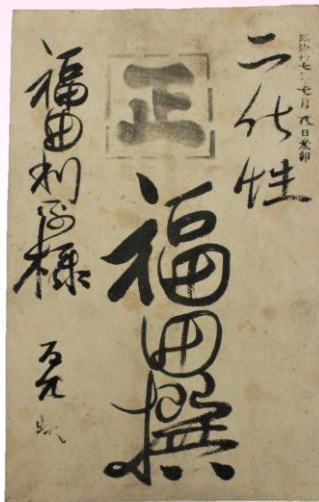
蚕種を取り扱う業者が所有した営業許可証と製造業者が結成した組合の組合証です。明治時代以降、輸出用生糸の品質向上を図るため、政府は元となる蚕種を製造する蚕種屋の営業は許可制としていました。また、蚕種を含めた絹製品の品質向上を目的に蚕系組合への加入が義務付けられていました。福田家が蚕種屋を経営していたことがわかる重要な資料です。



▲ 蚕種袋（明治時代 福田家）

蚕紙

蚕紙とは、蚕種を産み付けさせた厚紙のことです。蚕卵紙（さんらんし）、種紙（たねがみ）ともいいます。蚕種屋の手によって卵を産み付けられた蚕紙は薄い紙で作られた袋に梱包され、各地の養蚕農家に出荷、流通されました。また、蚕紙の裏面には製造人と取次人（販売人）の名前が明記されています。この蚕紙は製造人が、諏訪郡平野村（現在の長野県岡谷市）の中村保五郎が生産したもので、福田家の手を経て上里町周辺の養蚕農家に流通していたことが分かります。



▲ 蚕紙（左が表面、右が裏面 明治 福田家）

第3章 雛人形と養蚕業

知られざる関係性に迫る

ここまで敷地家、福田家では明治から昭和にかけて、養蚕業が盛んに行われてきたことを紹介してきました。先にふれたように養蚕業が盛んに行われていた時期は両家で雛人形が飾られていた時期と重なります。これらの養蚕と養蚕業について、一体どのような関連があったのか、両家から見つかった雛人形に関連する資料に基づき、深く掘り下げてみたいと思います。

雛人形から見る養蚕業

－養蚕が上手くなるように－

衣笠様人形▶

敷地家、福田家の雛人形関連資料の中で養蚕に直接関係するものに衣笠様（きぬがささま）の浮世人形と春駒（はるごま）人形があります。

衣笠様人形は、敷地家に伝わった人形です。「衣笠様」とは、江戸時代後期から昭和にかけて養蚕守護神として信仰されていた神様で、正式には「衣襲明神（きぬがさみょうじん）」と呼ばれ、蚕紙と桑の枝を手を持った女神の姿をしていると考えられています。敷地家の人形も蚕紙のついた桑の枝を持っています。



春駒人形▶

春駒人形は福田家に伝わる人形です。陶器製で馬の頭の作り物を持った男の子の形をしています。「春駒」とは、もとは芸能の一種で、正月に馬頭形をした作り物を持ち、民家を訪ねては歌や踊りを見せて歩く芸人のことをいいます。春駒が訪れた家ではその年の養蚕が大当たりすると伝えられており、現在でも群馬県川場村では伝統芸能として続けられています。

阪本英一氏によれば衣笠様人形は、大正から昭和頃にかけて、春駒人形は戦後になってから流行したもので、どちらも養蚕が上手な女性に育ってほしいという願いを込め、初節句に贈答されたといえます。



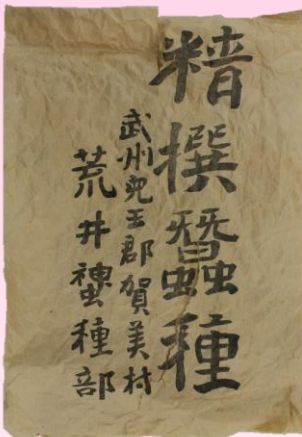
収納方法から読み取れる雛人形と養蚕業の関連性

梱包材（福田家）

福田家の雛人形は発見当時、木箱の中で和紙に梱包された状態で発見されました。詳しく調べた結果、梱包に使われていた和紙には、蚕種の品名や製造業者の名前が印刷されており、蚕種の包装紙であったことが分かりました。梱包材として再利用されたため、破れも多く一部しか判読できませんが、児玉郡内で蚕種製造が盛んだった明治から大正時代のものと考えられます。そのため、今回展示した雛人形が主にその頃から福田家にあったことを示す重要な資料となります。また、これら蚕種袋が雛人形の梱包に用いられるということは、雛人形の購入や維持にかかる費用の多くが養蚕で生じた収益であったことを語っています。



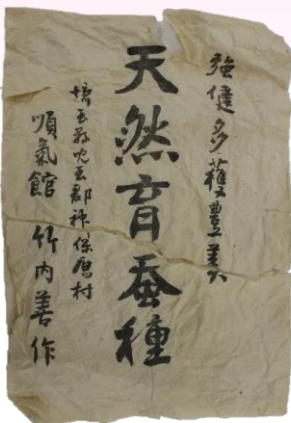
▲ 裃雛の梱包材として利用されていた蚕種袋



▲ 蚕種袋「精撰蚕種 武州児玉郡賀美村 荒井蚕種部」



▲ 発見時の福田家雛人形



▲ 蚕種袋「強健多種豊美 天然育蚕種 埼玉県児玉郡神保原村 順気館 竹内善作」



▲ 蚕種袋「蚕種 大字宮戸 金井吉五郎」

No.		證		大正10年6月17日			
金井吉五郎殿		埼玉縣児玉郡福田村		桑拓館蠶種製造所			
年	月	日	種	枚	代	價	計
大正	10	6	日支	200	72.00	金	72.00
年	6	17	秋支				
大正	10	6	秋支				
年	6	17	秋支				
右領收候也						主任	

▲ 桑拓館蚕種製造所「証」

福田家の文書の中に金井吉五郎宛の文書が確認されました。日付大正10年6月17日付となっており、左の蚕種袋が雛人形の梱包に使われたのも同時期と考えられます。



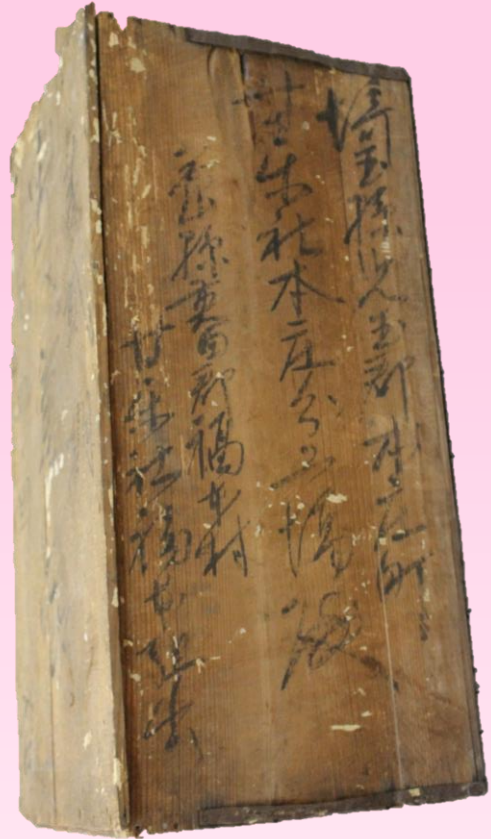
◀蚕種袋「藤田村 松本暁」

損傷が激しく、辛うじて「藤田村」と「本 暁」だけ判読できます。後者は藤田村の蚕種業者である松本 暁のことと想像できます。大正5年刊行の『児玉郡蚕種業史』には、児玉郡内の有力な蚕種業者として広告が載っており、藤田村（現本庄市）の蚕種業者としてその名前が見えます。見つかった蚕種の包装紙として、詳細が分かる唯一の資料です。

収納箱（敷地家）▶

雛人形が収められていた木箱です。箱の側面には、墨で文字が書かれており、「埼玉県児玉郡本庄町 甘楽社本庄分工場殿 岡山県英田郡福本村 甘楽社福本組出」と読み取れます。

「甘楽社（かんらしゃ）」とは、群馬県北甘楽郡富岡町（現在の群馬県富岡市）を拠点にした生糸の製造組合のことです。手作業で生糸を生産する業者が集まり結成された団体です。明治時代に輸出や品質向上を目的に結成され、戦前まで全国に組と呼ばれる下部組織を持っていました。箱の墨書きは、岡山県の福本組から本庄町（現本庄市）の本庄工場に宛てて出された荷物に使われた箱であることを表しています。記録や言い伝えがないため、敷地家との関係は不明ですが、生糸工場である本庄工場にあった箱を敷地家で雛人形の収納箱として再利用されていることが分かります。



敷地家雛人形収納箱（明治～昭和初め頃）

コラム 神川町の桑とり雛

上里町に隣接する児玉郡神川町には、雛人形と養蚕とが密接にかかわる民俗事例が確認されています。それは「クワトリビナ」という風習です。神川町の旧神泉村地域では、初節句のお祝いでも贈答された人形が雛段に入りきらなくなると家の人々が「桑取りに出すべ」といって雛人形を桑畑まで運び、桑の切り株に乗せ、養蚕の成功を祈りました。現在、同地区では養蚕の衰退とともに桑畑がなくなり、この風習もなくなってしまったといえます。



おわりに

－ 雛人形と養蚕業の関連性 －

ここまで上里町大字忍保の敷地家・福田家に伝わってきた雛人形と養蚕の資料を紹介してきました。これら雛人形を見ていると、当時の雛祭りも現代と同様に女の子の誕生を祝い、また彼女たちの健やかな成長や幸せな暮らしを心から祈るものであったことが分かります。

養蚕の観点では、明治から昭和にかけて、上里町では養蚕業が広がって収益が生じたことにより、地域全体が豊かになっていきました。すでに述べたようにその豊かさは神保原駐車場の設置をはじめ、町の発展をもたらしています。また、ある面では豪華できらびやかな装飾を持つ雛人形の購入につながりました。今回紹介した雛人形の梱包材として蚕種袋が使われていることは、そのことを示すものと評価できます。

このことを言い換えれば、養蚕業の発展と普及が華やかな雛人形を生んだといえそうです。

さらに興味深いのは、衣笠様や春駒人形等、雛人形のモチーフの中に養蚕に関連する習俗が認められるという点です。養蚕の担い手が女性であり、彼女たちを中心に収益を得ている地域にとっては、大人たちは娘に「養蚕の上手な大人」に成長してほしいという願いがありました。その願いを込め、きらびやかな人形を用意し雛祭りが行われたのではないかと考えられます。

【参考文献】

畑野栄三『全国郷土玩具ガイド 2』婦女界出版社 1992年

武井武雄『日本郷土玩具-東の部西の部-』金港堂 1934年

山田徳兵衛『日本人形史』富山房 1933年

上里町史編集委員会編『上里町史』通史編 下・別巻 上里町 1998年

神泉村教育委員会編『神泉村史』民俗編 神泉村 2003年

本庄市教育委員会『本庄市の養蚕と製糸-養蚕と絹のまち本庄-改訂版』2011年

丸山修「平成10年の古民家所在確認調査について」『研究紀要』第14号 上里町立郷土資料館 2016年

埼玉県蚕糸業協会編『埼玉県蚕糸業史』1960年

片倉信一『ヤマト百年回顧録』株式会社ヤマト 1972年

埼玉県編『新編埼玉県史 通史編5 近代1』1979年

埼玉県編『新編埼玉県史 通史編6 近代2』1979年

畑中章夫『蚕・絹糸を吐く虫と日本人-』晶文社 2015年

伊藤智夫『絹Ⅰ～Ⅱ』ものとの人間の文化史68 法政大学出版局

小暮秀夫『児玉郡蚕種業史』文林堂活版所 1916年

沢辺満智子『養蚕と蚕神』慶應義塾大学出版会 2020年

阪本英一『養蚕の神々』群馬県文化事業振興会 2008年

埼玉県北部地域振興センター本庄事務所ホームページ「カイコって何だろう?! 蚕の成長日記」
(<https://www.pref.saitama.lg.jp/b0111/midokoroh/kaiko.html>)

令和4年度企画展 展示解説

おひな様とおかいこ様

発行：令和5年2月4日

上里町教育委員会 郷土資料館

展示・編集担当 林 道義